

岐阜県家庭教育学級実践事例報告書

別紙様式 I

講演会型+サロン型(中学校)

学 校 名 等	恵那市立上矢作中学校、岩邑中学校、串原中学校
実 施 日 時	令和6年12月5日(木) 11:00~12:05
会 場	上矢作コミュニティセンター 講堂
参 加 人 数	上矢作中学校全校生徒 32 人、岩邑中学校全校生徒 127 人、串原中学校全校生徒 17 人、保護者、引率職員等を含め 250 人
学習課題(分野)	「いのちの理由」の授業【命の大切さ】
運営者の願い	未熟児で生まれ、また、難病を抱えても小さな命を懸命に生き抜く新生児とそれを支える家族の営みを一番近くで医師として支えてみえる寺澤先生の話から生徒には自分の命の理由と合わせて考えてほしい。自分の生を精一杯生きようとする態度を養いたい。
学 習 の 内 容	

<実践の経緯>

- 1 寺澤大祐先生(岐阜県総合医療センター小児科医長)の話をみんなで聞きたい
- 2 岐阜県教育委員会健康教育支援事業「いのちの授業講師派遣」に申請
- 3 申請が通り、講演会開催となる(上矢作中学校 PTA 家庭教育委員会が後援)
- 4 令和8年度統合される恵那南地区の中学校に参加を呼びかける

<当日の内容>

- 1 寺澤先生の講話「いのちの理由」
- 2 質疑・感想交流
- 3 小グループに分かれて交流会

<講演の概要>

- ・体重が 300g を下回るような赤ちゃんや出生時に目がはっきりと形づくられていない赤ちゃんなどの治療や手術に携わる経験を通して、いつも「すべての子供が大人になりますように」と願いながら赤ちゃんの命を救うことに全力で向かっている。
- ・実際の現場では、治療の甲斐なく赤ちゃんが命を落とすこともあり、数多くの体験の中で「子供が生き抜いていくことは奇跡だ」という思いを強く持ち始めた。
- ・「あなたたちが、ここにこうして生きていることは当たり前ではない、命そのものが何事もなく無事に育つ奇跡の連続の中で、あなたたちに関わった医者や親、周りの人たちの支えがあって今がある。」ことを伝えたい。
- ・生きていることの意味(いのちの理由)について、「命を大切にすることでなく、生かされた自分が自分の役割をまっとうする必要がある。」ことを力強く語られました。

<授業の感想 参加した中学生・保護者>

最近よくお母さんと喧嘩して、酷い事を言うてしまうのですが、あんなに小さい命が幸せになろうとしている、頑張っているのに、満足に呼吸ができて、喋ることができて、動ける私達がなんでこんなにお互いを傷付け合っているのだらうと、すごく恥ずかしくなりました。人には役割があると寺澤さんは言いました。私は今まだ中学生です。が、自分の役割、生まれてきた理由、私が私でいる理由というのを見つけられるように過ごしたいなと思います。(中学生)



先生の言葉の一つひとつが、優しくもあり、思いの強い言葉で、胸がいっぱいになって、何度も涙が出てきました。先生の言葉「大丈夫だよ、ぼくも見たことないからね」「みんなと一緒にじゃなくていいんだよ」「自分のふつうも大切にして、相手のふつうも大事にしてあげよう」優しい言葉が子どもたちにどんなふうに響いたかな。中学生にぴったりの言葉がけじゃないかなって思いました。毎日子育てに追われ、今日がくる奇跡をわかっているようでわかっていたけれど、改めて大切にしたいと思えました。今日、帰宅した息子と話すのが楽しみです。(保護者)



県の事業を活用して保護者、同地区の中学校と連携して家庭教育学級を位置付けています。

「命の教育」を教員、保護者、地域が一体となって推進しています。本物に触れる貴重な機会を活かして生徒の学びを深めています。



寺澤先生のお話は、テーマ通り自分の「いのちの理由」を問いかけるものでした。未熟児で生まれ、また、病氣と闘い、今ある「いのち」を精一杯生きようとする新生児のお話は、進路選択を控え自分の生き方を模索中の中学生とその保護者の心に響く内容でした。

新生児医療の最前線で活躍する方の生き方・学びは、中学生のこれからの生き方の指針となりました。

また、生徒と保護者が同じ話を聞くことは、家庭での自然な会話が増えることにつながります。「今日の話どうだった?」「あなたが生まれたときはね...」日頃は口数が少ない中学生もきっと自分の「いのちの理由」を考え、よりよい生き方を模索し始めるにちがいありません。

